

主 題：さ迷う人生との決別**聖書箇所：ペテロの手紙第一 2章22-25節**

「救い主が生まれた」と羊飼いたちに告げたのは天使たちでした。待望の救い主が約束通りにこの世にお見えになった。しかしながら、この世はこの方を歓迎しませんでした。歓迎しなかつただけでなく、主を十字架につけて殺すという、大変愚かで恐ろしい選択をしたのです。しかし、主イエスはそのような愚かな者たち、すなわち、私たちをその罪から救うために確かに来てくださいました。そして、そのすべてのことは、神が預言者を通して語らせたとおりでした。ベツレヘムで今から2000年ほど前にお生まれになった方は、確かに、約束の救世主でした。ペテロはこのイエスが救い主であること、救世主であることを証明していこうとします。彼はイエス・キリストこそが真の救世主であることを明らかにしています。

今日、私たちはこのペテロのメッセージを見ていくのですが、皆さんに見ていただきたいのは、彼が三つの証拠を挙げて「イエスが救世主だ」と教えているところです。ご覧ください。22-25節「:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。:25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」

☆イエスが救い主であることの証明**1. 罪のない生涯を送られた 22節**

彼の生涯は罪がなかったと言います。罪を犯したことがないお方であると。

1) 行いにおいて全く罪がない

22節の初めに「キリストは罪を犯したことがなく、」とあります。つまり、イエス・キリストの行いについてペテロは明らかにするのです。この「犯したことがなく」という動詞は、不定過去という時制、アオリストを使っていることに気付いていただきたいのです。ここで「不定過去」という時制を「総合的用法」をもってペテロは用いるのです。説明します。非常に大切なことです。「不定過去」という時制を「総合的用法」で用いるとはどういうことなのか？それは「行動のすべてを総合的に捉える」ということです。例えば、「彼は生きた」と言ったとき、そこには「誕生から死まで」が含まれています。全体を総合的に言っているのです。何年だとか、どのようにということに関係なく、その人生のすべてを表わしています。そういう用い方をするのです。

ここでそのように用いられているということは、ペテロが言いたかったことは、イエス・キリストのその幼少期や晩年というのではなくて、生まれてから死に至るまで、そのすべての行いにおいて彼には罪がなかったということです。このことは私たちにとって非常に大切なことなので、敢えてこのように説明をしました。なぜなら、このことが繰り返されているからです。彼は誕生から死に至るまで、人生のすべてにおいて「罪を犯す」ことがなかったとペテロは言うのです。

このことはペテロの告白だけでなく、いろんな機会に見て取ることができます。例えば、イエス・キリストに対して「信じる」と告白していながら本当は救われていなかったユダヤ人たちがいます。ヨハネの福音書8章に書かれています。8:46「あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。」「もし、わたしのうちに罪があるというならそのことを明らかにしなさい」という問いかけにだれ一人答えることができなかつた。イエスは「わたしの生涯を見てご覧なさい。いったい、わたしのどこに罪があるのか？」とこのユダヤ人たちに問いかけられました。だれも罪を指摘することができなかつた。

晩年になって、イエス・キリストが裁判官ピラトのもとでさばきを受けられたとき、ピラトはよく彼を取り調べました。なぜ群衆が、また、特に祭司長たちがイエスを訴え出て「十字架にかけて殺せ」と叫ぶのか、ピラトはよく分かっていた。それはイエスの罪ではなくて彼ら自身に問題があること、イエスへの妬みからそのようなことをしていると知っていたのです。ヨハネ18:38「ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」彼はこう言ってから、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には罪を認めません。」と。裁判官が調べてもイエスのうちには罪がなかったのです。

また、イエスと寝食をともにして来た弟子の一人ヨハネ、イエスが愛した弟子の一人でしたが、彼はこのように言っています。Iヨハネ3:5「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなた

がたは知っています。キリストには何の罪もありません。」と。傍でいっしょに暮らして来た弟子にしても、「殺せ」と叫んでいる群衆の訴えを受けてイエスを調べた裁判官ピラトであっても、そして、イエスの許にいた連中の中のだれ一人も、イエスのうちに罪があることを指摘することができなかった。ペテロが言ったように「イエスは行いにおいて完全に聖い存在であった」のです。

2) ことばにおいても全く罪がない

「その口に何の偽りも見いだされませんでした。」、行動だけでない、イエス・キリストのことばにおいても罪がなかった。この「偽り」とは「うそ、策略、悪巧み」という意味です。「見いだされませんでした。」という動詞も、「犯したことがなく」で見たのと同じように、これも「不定過去の総合的用法」が使われています。イエス・キリストの生まれてから死ぬまでのその生涯において、このイエスの口から悪いことばが一切出て来なかったということです。しかも、ここは受動態で書かれています。だれもイエスからそのような悪いことばを聞いたことがなかったからです。イエスとともにいた連中も、通りがかりに聞いた人も、どんな人もイエスの口から神が耳を覆うようなことば、汚れたことば、悪いことばが一切出ていなかったということです。イエスは常に真理を語っておられたのです。

イエスは行ないやことばだけでない、すべてにおいて神に喜ばれていました。神が要求している完全な基準に達していました。それほど彼には罪がなく、すべてにおいて聖いお方だったということです。ここでもう一つ見ていただきたいのは「見いだされませんでした」という動詞です。原語ではこのことばの前に否定の接続詞が付けられています。これは「慎重に、注意深く、綿密に調べた後の結論」を言っています。ペテロがここでこのように記したのは、何となく記したのではなく、だれかからそう言われたからというのではなく、彼自身、綿密に調べた上でのその結論なのです。イエスは行ないにおいてもことばにおいても、だれ一人そこに罪を見いだすことができなかったとここで告白しているのです。

なぜ、イエスが行ないだけでなくことばにおいても罪がなかったのか？聖書を学んでいるならその答えは分かります。彼の心が完全に聖かったからです。私たちがどうして悪いことばを口にするのか？それは私たちの心に問題があるからです。心が汚れているからです。イエスは言われました。マタイの福音書 15 : 18 「しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。」、ルカ 6 : 45

「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」。

つまり、心の中にあるものが必ず口に出て来るのです。私たちがだれかの悪口を言うときはその人に対して悪い思いを持っているからです。だれかに対する怒りを持っているならそれは形となって出て来るのであって、悪口となって出て来たりします。私たちの問題は「心」にあるのです。心が汚れているゆえにそこから汚れたことが出て来るのです。しかし、イエス・キリストは違った、行動だけでなくことばにおいても「罪、汚れ」がなかったと言います。

なぜ、なかったのか？人間はみな心が汚れているではないですか？あなたも私も…。良いことをしたいと思っても残念ながら悪い思いがすぐに心に浮かんで来ます。なぜ、イエスにはそれがなかったのでしょうか？それはこの方が「約束の救世主」だからです。実は、この救世主のことについて、預言者イザヤがイエスの誕生の約 700 年前に預言しています。イザヤ書 53 章、この箇所はこれから何度も見ます。53 : 9 をご覧ください。「…彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。」、イエス・キリストが生まれる約 700 年前に預言者が言うのです。誕生する救世主は「暴虐を行わず、その口に欺きはなかった」と。この方はことばにおいても行ないにおいても罪から完全に離れているということです。

旧約聖書のみことばを見て、約束の救世主に関する預言を見たときに、このイエス・キリストの歩みこそが預言されていた救世主であると言えるのです。イエス・キリストが人生において罪のない生涯を送られたということ、これがイエスが救世主だとペテロが証拠として挙げている一つ目の証拠です。

2. 義なる生涯を送られた 23 節

二つ目の証拠として、「イエスは義なる生涯を送られた」ということを挙げています。23 節「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、…」、つまり、主イエス・キリストはどんなに不当に扱われようと、常に父なる神の前に善を行った、父なる神が喜ばれることを行ったということです。人々はその主に対して何をしたのか？「ののしった」と言います。この「ののしる」という動詞は現在形です。彼らは継続してイエスを「ののしって」いたのです。「ののしる」とは「侮辱する、罵倒する」という意味のことばです。確かに、そうしました。イエスが悪霊を追い出したり奇跡を行っていた時に人々は何と言ったのか？マタイ 12 : 24 「これを聞いたパリサイ人は言った。「この人は、ただ悪霊どものかしらベルゼブルの力で、悪霊どもを追い出しているだけだ。」、イエスの奇跡のみわざを見て人々が言ったことは「この人はサタンを借りてやっているのだ」でした。創造主なる神に対して、

私たちを救うために来てくださった救い主に対して人間が言ったことは「この人はサタンの方でこんな働きをしているのだ」と、そうして主を侮辱するのです。

また、嘲られました。神であるお方に対して人々は彼を嘲ったのです。この方を軽蔑し、この方の悪口を言い、そして、嘲笑するのです。人々はそれがいかに恐ろしい罪であるかということに気付いていません。そこにいるお方は神であるのに、そのお方に対して人間はこんなことを平気で行って来たのです。ある人々はこの主に対してつばを吐きかけこの方を笑いました。人間は主に対してこのように悪に悪を重ねたひどいことを行うのですが、それに対して主は「ののしられても、ののしり返さず、」と、悪に対して悪で報いることをなさらなかったのです。

「苦しめられても、」と、人は主をののしただけでなく、主を苦しめたのです。イエス・キリストを殺そうと何度も殺害未遂が起こりました。拳で叩いたりむちで打ったり最終的には彼を十字架につけるのです。このように苦しめられても主はその人たちに対して「おどすことをせず、」と、彼らを脅迫したりしなかった。「今に見ていなさい、必ず、おまえたちはさばかれる」とそのような脅迫をなさらなかったのです。人々がしたことは彼らにふさわしい行為ですが、主はそのような人たちに対して愛をもって接しられたのです。

イエス・キリストのその歩みを見たときに、人の悪に対して常に善で応えておられます。イエスは常に「父なる神が喜ばれること」を選択したのです。パウロはローマ書12：21で「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」と言っています。なぜ、パウロがこんな教えをしたのでしょうか？パウロはだれを目標に生きていましたか？だれを模範にしていましたか？ペテロのことばを借りるなら、1ペテロ2：21に「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」とあります。ですから、ペテロもイエス・キリストの歩みを見てその通りに生きようとしたのです。ペテロにとってもイエス・キリストは信仰者としての模範だった。パウロも同様です。「キリストを見倣って」と彼らは言っています。

つまり、彼がこのように教えたのは彼らが思いついたからではありません。彼らはイエスのその歩みを見て、まさに、イエス・キリストがそのように生きていたからです。イエス・キリストの歩みというのは、悪に負けたものではなく、却って、善をもって悪に打ち勝つものでした。パウロは1テサロニケ5：15で「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。」と語っています。イエスはそのように生きていたのです。だから、パウロもそのように生きようとしていたのです。そして、そのように生きるようにと、彼らはクリスチャンたちにこのメッセージを記したのです。

次を見てください。「正しくさばかれる方にお任せになりました。」とあります。人の悪に対して常に善で応じただけでなく、すべてのことを父なる神に任せておられます。私たちの問題は、何か悪いことをされたら返しをしようと、すぐにしなくてもそういう思いを心の中にずっと抱いている、それが私たちです。だから、その人たちに不幸が起こればそれを喜んだりします。イエスはそのような私たちとは違ったのです。イエスは自分が手を下して何かをするのではなく、それをすべて父なる神に委ねたのです。なぜなら、必ずその日が来るからです。このようにイエスを扱った人たちに…。人々のこのような扱いは私たちと無関係と言ってはなりません。私たちも同じようなことをしているからです。私たちもイエス・キリストを心から受け入れようとしなさい、この方を愛そうともしない、この方に背を向けて「私は人生を好きに生きていきます」と、同じように逆らい続けているからです。イエス・キリストの救いのメッセージを聞いても、私たちが言うことは「必要ありません」です。

ローマ12：19には「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」と書かれています。父なる神は必ずあなたのその選択に対してそれにふさわしい報いを与えます。あなたは全能なる神の前に立ってその全知なる神の前ですべてのことが明らかにされてその方によってさばかれるのです。だれもそのさばきを逃れることはできません。そして、そのときに神はあなたにふさわしいさばきを下されるのです。神は私たちの悪に対してそのときに報いを与えることがなかったとしても、私たちが行ったことに対しては、必ずその報いを受けるときがやって来ます。そのことを警告している、「さばきのときが来る」ということを警告しているのです。

もし、その「さばきの日」がないのなら、イエスはこの世に来なかったはずですが。救い主は来なかったはずですが。救い主と言われるのは私たちに「救いが必要」だからです。何からの救いか？永遠のさばきから、永遠の滅びからです。この罪の力、束縛からの救いです。それが必要だから来てくださったの

です。主イエス・キリストがなされたことは、自分でさばきを下すのではなくて父なる神にお任せになったことです。イエスがしたことは、地上にあって人の悪に対して善で応えたことです。このようなお方であったと、ペテロは私たちに明らかにしてくれたのです。

このように皆さん、イエス・キリストがどのようにその生涯を歩んで来られたのかを見たときに、私たちはイザヤが預言していた約束の救世主こそこのイエスであると見ることができます。イザヤ53:7には「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」と書かれています。今、私たちが見て来たように、人がどんな悪を行ってもイエスはそれに反応されたのではなく善をもって応えられました。イザヤ書で預言されていることは、彼は苦しみを受け痛めつけられたが、それに対して罪をもって反応しようとはしなかった。罪をもってそれに応答しようとしなかったのです。イエス・キリストのその生き様というのは、まさに、このイザヤが預言していた救世主そのものの姿です。

3. 罪の身代りの生涯を送られた 24節

24節の初めに「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。」とあります。イエスは罪のない生涯を送られただけでなく、義なる生涯を送っただけでなく、犠牲の生涯を送られました。罪の身代わりとなられたということです。この「負われました」ということばは「罪を自分の身に負う、背負う、担う」という意味です。つまり、イエス・キリストがああ十字架に架かってくださった。なぜか？あなたのすべての罪を背負ってあなたの代わりに十字架にいつてくださったということです。それは「あなたの罪を取り除くために」です。

イエス・キリストは、本来なら、私たちが受けるべき罪のさばきを代わって受けてくださったのです。イエスの十字架は完全にあなたの身代わりだったのです。ということは、イエスを十字架に追いやったのはローマの兵隊でもなかった、ユダヤ人たちでもなかった、あなたの罪です。「自分から十字架の上で、」とあります。イエス・キリストは無理矢理十字架に磔になったのではなかった。イエスは自分から十字架に架かれたのです。イエスはあなたの罪を赦すために来てくださったからです。だから、イエスは自ら進んであなたのすべての罪をあなたの代わりに背負って、あなたが受けるさばきを十字架上で受けてくださったのです。私たちが十字架を見るときに「この十字架は私の身代わりだ」と、私たちはしっかりと認めなければなりません。

そこまでして、主はあなたへの愛を示してくださっているのです。喜んで自分のいのちを捨てて、この方はあなたに罪の赦しを与えようとしてくださったのです。そのことをペテロはここで言うのです。パウロも言っています。Iコリント5:21「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」と。あなたの罪を負ってイエスは十字架で死に、そして、あなたが受けなければならないさばきを代わりに受けることによって、私たちに罪の赦しを備えてくださったのです。こんな割に合わないことをしてくださったのです。

私たちがして来たことは、生まれながらにずっと神に逆らって来たことです。神はあなたを愛してすばらしい恵みを日々与えてくださっています。必要なものを与えてくださっている。その神の恵みの中で生きて来ました。でも、私たちがその恵みの神に対してして来たことは、その神に逆らい続けることだけです。その方が望んでいることを選択しない、私たちが愛してくださっている神を愛することもしない、あなたを造ってくださった神に背を向けて、自分で勝手にこの世に生まれて来たかのように、学校でそのように教えられるからと信じて、好き勝手な生活を選択して来たのです。

なぜ、こんな者のために神がいのちを落とす必要があったのでしょうか？神は私たちがその通りに、自分の罪の報いを受けるために永遠の滅びに落とすとしても当然です。そうすべきです。しかし、この神はあなたや私をそのさばきから救うために永遠の地獄から救うために、ご自分のいのちを犠牲にしてくださったのです。だれもそんな痛み苦しみを経験した人はいません。私たちも人生の中で「いろんなことに苦しんでいる」と言いますが、こんな痛み苦しみを経験した人はどこにもいません。

なぜなら、創造主が、被造物の罪を赦すためにご自分のいのちを捨ててくださったのです。もし、私たちがそのことを疑うのなら十字架を見ることです。十字架に掲げられていることはそのことです。そのことを私たちに教え続けるのです。主イエス・キリストは、あなたの創造主は「あなたのためにいのちを捨てた」と。

こうしてイエス・キリストは、身代わりとしてあの十字架でいのちを捨ててくださった。その目的のために彼は来てくださった。そして、彼の人生はすべてにおいて罪のないものであった、なぜ、それがここに記され、なぜ、大切なことなのか？それは、罪を持っている人は救世主ではないからです。思い出してください。旧約の時代に、なぜ神はいけにえを命じたのか？です。いけにえをささげることによって神はその罪を赦してくださった。ですから、人々はいけにえを持って来て罪の赦しを神に求めたの

です。でも、そこには問題がありました。毎年それをしなければならなかった。動物の血はその人の罪を完全に赦すことができなかったからです。また同時に、そこには条件がありました。どんな物を持って来てささげても良かったのではなかったのです。欠陥のあるものは一切ささげてはならないという神の命令がありました。レビ記 22 章には「:19 あなたがたが受け入れられるためには、それは牛、羊、あるいはやぎのうちの傷のない雄でなければならない。:20 欠陥のあるものは、いっさいささげてはならない。それはあなたがたのために受け入れられないからである。」と書かれている通りです。ですから、傷のないものでなければならなかった。神はそれしか受け入れなかったからです。でも、動物のいけにえは一時的な赦しはありましたが、永遠の赦しはなかったのです。私たちは永遠に私たちを罪から赦してくださる完全ないけにえの到来を待っていたのです。

だから、バプテスマのヨハネがイエスを見たときに何と言いましたか？ヨハネ 1 : 29 「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」と。動物の小羊では我々の罪を完全に赦すことはできなかった。そこで神が完全に赦すことができる神の小羊を送ってくださったのです。このイエス・キリストによって、あの十字架にあって、どんな罪人でもその罪を赦していただけるのです。その救いが我々人間に与えられたのです。私たちの罪のためにこの方が死んでくださった。そして、この方が救世主であるという預言が成就しただけではありません。確かに、この方はすべてにおいて罪のない聖い方、ゆえに、神はこの方のいけにえを喜んで受けてくださった。罪のないイエス・キリストのそのいのちこそが、私たち人類にとって唯一の希望でした。この方のいのちがささげられることによって、私たち罪人のために神ご自身が完全な救いを備えてくださったのです。

この中で、まだこの救いを受け入れずにこの神に逆らい続けている方がおられるなら、心からあなたに語りしたいと思います。神に逆らい続けていったいどんな益があるでしょう？この瞬間にあなたのいのちが取られてしまったら、あなたが行く所は決まっています。神に逆らって来たあなたが行く所は、あなたに一番ふさわしい所、永遠の地獄です。そこには悔い改めもありません。そこにはもう救いのチャンスもありません。だから、神は待ってくださっているのです。この救いをいただくように「今、救いを求めてわたしのもとに出て来なさい」と神は待っていてくださるのです。今ならまだ、あなたが罪を悔い改めてイエス・キリストを信じて従っていこうとするなら、あなたの罪は赦されるのです。救いはまだあるのです。その機会をくださっているのです。気付いてください。その救いの機会を拒んでいるのはあなただということに…。神が備えた救いを拒んでいるのはあなたなのです。今日があなたにとって救いの日となることを心から願います。

さて、「イエスは救い主だ」とペテロはこうしてそのことを明らかにしました。その上で、この 24 節の後半から 25 節で、なぜ、救い主が来られたのか？救い主が来られた目的についてペテロは三つのことを教えます。

☆救い主がこの世に来られた目的 24 b、25 節

1. 生き方が変わるため

「:24 …それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。」「それは、」とその目的を言います。「罪から離れる」ことです。かつて、私たちが仕えて来た罪、その罪の奴隷だった私たちが主人である罪に完全に決別するのです。私たちは罪に対して死んだ者なのです。パウロが言っています。「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」（ローマ 6 : 11）と。救いに与っているあなたが覚えなければいけないことは「自分は罪に対しては死んだ」ということです。かつての神に逆らっていた私は死んだのです。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」（ガラテヤ 2 : 20）、かつての神に逆らって来た私は死んだのです。

そして今度は、私は義のために生きる者として新しく生まれ変わったのです。神に背を向けて神に逆らって神が憎まれている罪を愛して生きて来た私が、その罪に対して死んで、今度は、新しく生まれ変わって義のために神が喜ばれることを行っていく者として生まれ変わったのです。

救い主が来てくださった目的は、私たちが新しく生まれ変わるためです。罪の奴隷であった私たちが神の奴隷として、神に逆らって来た私たちが神に従う者として新しく生まれ変わるためにイエスは来てくださったのです。そして、その生活をあなたはすでに始めておられます。不完全であっても、神に喜ばれることを願いながら神に従って行こうとする。そのような新しい生き方が生み出される。そのために救い主は来てくださったのです。

2. 罪を赦すため

24節でもう一度そのことに触れています。「キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」と。「打ち傷」とは血が流れる傷のことです。むち打たれて血が流れる、でも、それだけでなくその人を死へと導いていく傷のことです。イエスはむち打たれ、釘を打ち込まれ、血を流して、その傷によって死んでいかれたからです。「キリストの打ち傷のゆえに、」、言い変えるなら、キリストの死によっていやされたのです。これは肉体的ないやしのことではありません。霊的ないやしであることは皆さんおわかりでしょう。罪の赦しのこと、罪からのいやしです。救いのことです。イエス・キリストの死によってあなたは罪からいやされた、救われたということです。だから、あなたは新しい歩みを行うことが可能になったのです。これまであなたを捕えていたその罪の束縛から解放されたのです。罪の奴隷であったあなたは死んだのです。そして、あなたは新しく生まれ変わったのです。これもイザヤが預言した通りです。イザヤ53：5「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」と。

驚きを覚えませんか？今こうしてペテロのことばを見ています。でも、それよりもさらに約700年前に預言者イザヤが言ったことです。まさに、そのことがこのイエス・キリストによって成就したのです。イエス・キリストのあの十字架の死、あの身代わりの死があなたや私を完全に赦してくれる、その赦しの力をもっている。私たちはいやされるのです。この罪から救い出されるのです。

3. 神とともに生きるため 25節

「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」、**「さまよっていた」というこの動詞は現在形です。ずっとそのような歩みをしてきたということです。この「さまよう」ということばは「正しい道から横道に逸れてしまう、正しい道から間違った邪道に逸れていってしまう」ということで、道に迷っている様子、迷子の状態です。どっちに行ったら良いのか分からない、こっちが正しいだろうと思って歩いていっても行き詰まってしまうのです。正しくないからです。**

まさに、そのような生き方を私たちはしていたのです。イザヤが言います。53：6「**私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。**」と、私たちもかつては、どうすればもっと自分を楽しませることができのだろう、どうすればもっと自分を喜ばせることができのだろうと、自分の目の前にある選択の中で、自分が良いと思うことを選択して来ましたが、でも、私たちが期待していたものはそこになかった。気付いてみると、あっという間に年数だけが経っていたと。そこに残っているのは虚しさでした。いつまで経っても正しい道から外れていたら本当の満足を得ることはできないのです。本当の喜びを得ることはできない。まさに、道を外れて迷子になった羊のように、そこにあるのは不安だけです。そこにあるのは恐れだけです。どんなに叫んでみてもだれも助けてくれない、そんな状態です。暗やみが迫って来てどこに行ったら良いのかもわからない状態です。そんな人生を私たちは生きて来たのです。

しかし、言います。救い主が来てくださったことによってあなたは変えられると。「今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」と。かつてはそうだったが今は違うと、イエス・キリストを信じた今は違う、変わったからです。

「自分のたましいの牧者であり監督者である方」と、この「牧者」とは「羊飼い」のことです。羊飼いなというのはその羊1匹1匹のことをちゃんと見ています。羊の状態を見ています。病気なのかどうか、何が必要なのかをすべて見ています。その必要にちゃんと応じていきます。それが「羊飼い」です。ですから、羊は羊飼いの周りに集まるのです。羊飼いの声を聞いてそれに従っていくのです。

ペテロが言いたかったことは、ちょうど、私たちによく似ているのがこの羊であるということです。目先のことばかり見てしまって、気が付いたら群れから外れてしまっている。そういう愚かさをもっているのが羊です。まさに、それは私たちです。そこで、そのような私たちが羊飼いのもとに帰るのです。そのときに、この羊飼いは羊の必要を知ってその必要に答えてくれます。羊飼いはときにその杖をもって石をもって外敵と戦ってくれます。羊飼いの傍にいるならすべての必要が満たされます。守られます。そのことを言うのです。今まではさまよっていたけれど、今は本当の羊飼いの許に帰った、そこにいる羊のように満足をもって喜びをもって歩むことができると。「監督者」ということばがありますが、これは「守る人、番人」という意味があります。ですから、羊飼いは羊を守って必要を満たすだけでなく、守ってくれる、あなたを守ってくれるお方です。そのようなお方である神のもとに私たちはいるのです。

クリスチャンであればあなたはその神の許に帰ったのです。今、その方があなたとともにいてくださる。その神はあなたを離れることもない、何と感謝な人生でしょう！！そう思いませんか？全知全能の神があなたや私とともにいてくださり、この地上での歩みを導いていてくださる。その方の後について行くことができるのです。その方はあなたの必要を知っているから、ちゃんと必要をくださると言い

ます。道から外れたら、羊飼いはちゃんと矯正してくれる。外敵からも守ってくれる。あなたをしっかりと支えてくれる。あなたが野獣に襲われることがないように守ってくださる。あなたが愛するこの神の御手にあなたは保たれると言うのです。こんな人生を生きることができる、そして、クリスチャンであるあなたはこんな人生を始めたのです。

当然、私たちに要求されているのは、もっとそのことを喜びながら感謝しながら生きることでしょう、信仰者の皆さん。私たちは決して一人ではないのです。友だちがいるから嬉しいのではありません。家族がいるから嬉しいのではないのです。神がいるから嬉しいのです。なぜなら、友だちのいる人は世の中にいっぱいいます。家族もみんな持っています。でも、私たちが持っている喜びを彼らは持っていません。なぜか？そのカギは「神」だからです。

この方が私たちをしっかりと支えてこの方が私たちの手を引っ張って導いていってくださるのです。そんな人生をこの地上にあって生きることができる。そして、その人生はこの地上で終わるのではない、その後も永遠に続くのです。この神とともに私たちは生きることができる。さまよう人生に終止符を打つことができるのです。その人生からいやされることができるのです。そのために主は来てくださったのです。迷っているあなたを正しく導くために…。恐れているあなたをそこから救い出すために、この神の許にあなたを戻すために救い主は来てくださったのです。

今日、皆さんに心からお勧めすること、それは「救い主が来てくださった」、この救い主はあなたを救ってくださる、そして、ただあなたを救うだけでなく、あなたを新しい者に造り変えてくださり、新しい人生を与えてくださるのです。神が私たちに約束してくださった人生、まさに、それは私たちを生まれ変わらせ、罪を赦し、そして、この全知全能の神とともに生きる人生を私たちに与えてくれるのです。そのような人生をすでに歩んでおられる皆さん、神に感謝して、この方に信頼を置いて、そして、この方の為されるみわざに期待しながら従い続けて行くことです。地上においても、そして、その後においても、この方はあなたとともにいてくださるからです。

もし、この救い主を拒んでいる方がおられるなら、主はあなたにこの日をくださった。それはまだ神はあなたを見捨てていないということです。まだ、救いの機会をあなたに与えてくださっているのです。どうされますか？あなた自身は…。この救いを心からいただくのか、それともこれまでと同じように拒み続けるのか…。でも、覚えていてください。あなたのその選択があなたの永遠を決定するのです。そして、その決定に対してだれにも不満を言うことはできません。正しい選択をするべきです。あなたのために来られた救い主を信じて、この救いに与ることを心からお勧めします。